

宗教的救済

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 教授

小杉 泰

地震や津波のような天災、戦争などの人災は、歴史のなかで繰り返し起こってきた。そのたびに人びとは助け合って、それぞれの人生と社会を立て直す努力をしてきた。

細部を見ると、その考え方や方法は文化によって異なる。本稿では、イスラーム世界の場合を考えてみたい。7世紀のアラビア半島で始まり、洋の東西に広がったイスラームは、21世紀に入った現在も強い活力を示している。その活力の源泉の一つは、弱者救済を主張し、敗者復活を唱える思想といわれる。それゆえに、グローバル化で貧富の差が広がるなかで、虐げられた人びとの目に魅力ある教えと映るという。

イスラームが重視する弱者や困っている人びとの「救済」とはどのようなものか、歴史と現代を見てみたい。

1. イスラームの社会改革

ムハンマドが預言者と名乗ってイスラームという社会改革運動を始めたのは、西暦610年頃のマッカ（メッカ）である。当時のマッカは商人の町で、遠隔地貿易と地域内での商業活動で栄えていた。繁栄の結果として、貧富の差が生じ、富貴を尊ぶ社会となっていた。そこでの弱者は、貧しい者、困窮する者たちである。また、当時は部族的出自の貴賤が問題とされた。アラビア半島は自らの系譜と勢力を誇るアラブの諸部族たちが割拠しており、弱小部族や部族の保護を得られない人びともまた、社会的弱者であった。

イスラームは誕生直後からマッカ社会のなかで激しい迫害を受けた。その理由は、宗教面で一神教を唱えて当時主流の多神教を否定したことと、唯一神の前での人間の平等を主張し、支配的な富者・強者の奢りを強く批判したことにあった。

ムハンマドは後に迫害を逃れてマディーナに移住してイスラーム共同体を建設し、最後はマッカ勢との戦いにも勝利して、イスラームの確立に成功した。しかし、マディーナ時代でも経済的には困難が続き、困窮者の救済は優先事項であった。

聖典クルアーン（コーラン）には、次のような章句がある（数字は章と節の番号）——「乞う者を拒んではならない」（93:10）「（教えを拒むのは）孤児に手荒くし、困窮者に食物を与えることを勧めない者である」（107:2-3）「汝らが人前で喜捨をしても恵みにかわりはないが、貧しい者たちに密かに与える方がよりよい」（2:271）。これらの章句は、イスラームが弱者を救済する社会的義務を一人一人の生き方として強く要求している表れである。

2. 「災厄」という名の死

弱者救済は、生きている者同士のことである。では、イスラームでは死をどう考え、親しい人の死を遺族がどう受け止めるのであろうか。

イスラームの基本原理は、宇宙と人類のすべてを創造した唯一神（アラビア語でアッラー）を信じ、神の教えに帰依することであるから、生も死も神から与えられると信じる。来世での生を説くから、死は人生の本当の終わりではないとする。この教えは、かつても現在も、遺族にとって最大の慰めとなる。

その一方で、自分が今生きていることに感謝し、神が与えた日々の糧に感謝するとすれば、死が訪れた時にも文句は言わないのが礼節となる。生には感謝するが、死には文句を言うのでは、イスラームの観点からはバランスが悪い。

イスラーム以前のアラビア半島には、「泣き女」の習慣があった。誰かが亡くなると、一族の女性

たちが泣き叫び、場合によっては人を雇っていっそう泣き声を高めるという習慣である。イスラーム時代になると、これは禁じられた。「死」という神の定めた運命を批判することは、神への反逆に等しいというのである。

ところが、クルアーンに死がいいものだと述べられているわけではない。人の死は「災厄（ムスイバ）」と呼ばれる。「彼らは災厄（誰かの死）に出会うと、『私たちはアッラーに属し、かれへと還りゆく』と言う」（2:156）。

親しい人の死による別離に悲しみはつきものである。泣き女を雇ってわざとらしく騒ぎ立てることは禁止されたが、自然に流れる涙は当たり前という。イスラームのお悔やみの言葉は「あなたが災厄に耐えていることを、神が嘉しめますように」という。誰にとっても、親しい人の死は災厄であり、皆がその辛さに耐えるしかないのだ、という認識がよく示されている。

3. 現実的救済のための制度

社会改革として始まった歴史が物語るように、イスラームでは現世を否定したり嫌悪したりする考えは強くない。確かに「来世は現世よりもよく、永続する」（87:17）と述べられているが、これは当時のアラビア半島では現世のみが実在だとしていたのを批判したものである。イスラームでは、来世のためにも現世をきちんと生きるように主張するから、現世を捨てて来世を選ぶ発想は弱い。

「五行」として知られる信徒の義務は、第一が信仰告白、第二が礼拝で、第三に貧者・困窮者のための喜捨がくる。第四はラマダーン月の断食であるが、これにも貧しい人たちへの食事の供与、月末の喜捨などが付随する。第五のマッカ巡礼は犠牲祭と結びついている。犠牲祭には、牛や羊をほふって、その肉を3分の1は自分の家族で、3分の1を近隣の人びとに、残りの3分の1を貧しい人に配ることになっている。

こうしてみると、五行は「五つの信仰行為」といっても、社会的な救済の制度と結びついていることがわかる。クルアーンのなかでも「礼拝を確立し、義務の喜捨を支払い、拝礼者たちと共に拝礼しなさい」（2:43）と、神への祈りと困窮者の

救済を並べた表現が多い。

「喜捨」という訳語は仏教用語からの借用である。イスラーム法で義務的喜捨を指す「ザカート」はもともと「（財の）清め」を意味する。なぜならば、「彼らの財の中には乞う者や窮乏者のための明白な権利がある」（70:24-25）のであり、その部分は最初から自分の取り分ではない。財を所有する条件として、財のなかに貧しい人の取り分が埋め込まれている。したがって、喜捨も慈善というより、私有してはいけない分を「責任をもって返す」と考える。それによって残りの財が清められ、正当な所有権が生じるというわけである。

義務の分を超えて、任意の喜捨や寄付も推奨されるが、それも神からの報奨を期待してすべきとされる。喜捨を受け取る側が相手に感謝すべき、という考え方はない。受け取る側も主として、神に感謝する。喜捨や寄付は自分のためにするもので、相手を喜ばせるためではないとされている。

個人的な体験であるが、イスラーム世界では物乞いをする人には全く卑屈感はないし、お金をあげてもそれほど感謝の言葉を述べない。せいぜい、「あなたに神のご報奨がありますように」という程度である。エジプトに暮らしていた時、よく赤子を抱いた若い母親などに道の向こうから呼ばれることがあった。何の用かと思って行くと物乞いをされる。そのうえ、お金をあげても当たり前という顔をしている。

率直にいうと、物乞いに呼びつけられると腹が立つ。しかし、現地の人びとは誰もそんなことで腹を立てない。このような体験からわかったのは、慈善の機会を得ることを喜ぶべきという考え方があることである。それが社会規範となっていると、もらう側には何の負い目もない。さらに、イスラームがいう人間の平等性がある。物乞いとて同じ人間であるから、お金をもらう側からすり寄るべきだという考えさえもない。

弱者救済の制度は、喜捨に限らず多岐にわたる。10世紀頃には「ワクフ（寄進財産）」の制度が広がった。これは、自分の財産を寄付して、公共財として役立てるものである。寄付された財産はそれ以後、所有権の譲渡が停止されるので、ワクフ＝停止と呼ぶもので、イスラーム独自の所有権の

概念を示している。

ワクフを活用した公共財として、モスクや市場、病院などが有名である。病院制度は8世紀末からイスラーム世界で発展し、西欧にも大きな影響を与えた。ワクフとして、通りに水場を設けて通行人に供することも広範に広がった。今日でも、伝統的なイスラーム都市では、よく目にする。これは、水を皆に供与する乾燥地帯の慣習とイスラーム的な寄進制度が合わさった例であろう。

実際に困っている人がいると、寄進者もいろいろな着想を得るようで、後の時代になると「ヨーグルト容器の交換所」も登場した。これは、使用人がヨーグルトを買いに行った際に、誤ってガラスの容器を壊したら助けてもらう場所である。貴重な容器を壊してしまったら、金もない使用人たちは途方にくれるであろう。そうした人に同情した有産者が寄進をしたのである。

4. 現代イスラームと救済

現代のイスラーム世界は、西洋と邂逅して以来、大きく変化してきた。社会的な救済についても、一時は社会主義が広まった国もあるし、欧米の考え方や組織も入ってきている。その一方で、過去半世紀ほどはイスラーム的な制度が復活したり現代的に再生している。

理由の一つは、他者を助けたり相互扶助をおこなったりする場合に、長い歴史に支えられた固有の発想が有効性をもつためであろう。輸入された慈善（チャリティ）の思想は、簡単には根付かない。もう一つは、近代化をある程度進めた後にイスラーム回帰が起き、自分たちの考え方で社会をよくしたいという潮流が強まったためである。

また、経済の自由化、規制緩和、グローバル化などの影響で、公的な福祉が弱まり、地域社会のイスラーム的な相互扶助がその空白を埋めるという現象も生じている。イスラームの救済制度は個々の信徒の自発性にもとづくため、地域コミュニティに立脚し、小回りがきく。その意味で、行政よりもニーズに応じた対応がしやすい。

イスラーム復興では、モスクのない地域にモスクを建設し、礼拝の励行を勧めることが多い。モスクは、いつの時代にもコミュニティ・センター

として機能する。前述のように、礼拝と喜捨はセットとなっており、モスクができると喜捨集めがなされ、それを用いた福祉活動が始まる。

現代のモスクの特徴の一つは、しばしば低所得者層向けのクリニックが併設されることである。健康と医療は、現代人にとって必要不可欠である。そのようなクリニックでは、医師たちが無料奉仕したり、わずかな報酬で仕事をしたりしている。薬も、一般病院の4分の1程度の低価格で手に入る。喜捨を用いた医療助成によって、低価格が実現している。

5. 地震の場合——エジプトとトルコ

困っている人がいたら助ける、ということはイスラームでは、特別の慈善ではなく、日常的な信仰行為として身体化しているように思える。

地震の際などの救援には、そのような経験の積み重ねと福祉団体の組織力が発揮される。エジプトは地震の少ない国であるが、1992年にカイロ地震に遭遇した。M5.9程度ではあったが、地震が非常に少ないだけに、生まれて初めて体験する大きな揺れに皆が恐れおののいた。老朽化したビルの倒壊などで552人が犠牲となった。

被災者の救援に活躍したのは、ムスリム同胞団などのイスラーム団体であった。同胞団という名称が示すように、これはムスリムの同胞意識を高め、イスラーム的な社会改革を進める運動で、日頃から困窮者の救援や医療クリニックの経営をおこなっていた。地震の救援に際しては、これらのリソースを緊急に動員することができた。被災地に多くのテントを立て、迅速な援護態勢を築いたことは、被災者たちに高く評価された。同胞団の人気は震災救援を機に、それまでの支持者のみならず、一般の人びとの間でも高まった。

少し残念なことは、当時の同胞団が反体制派であったため、初動が遅れて批判を浴びた政府側がその救援活動を妨害する挙に出たことであった。たとえ政治的対立があっても、それは緊急時の対応として完全な間違いであろう。ムバーラク独裁体制は2011年に民主化革命で倒れ、その後の国会選挙では同胞団系の政党が第1党となったが、遠因は地震の際の対応にもあったように思える。

トルコはエジプトと違い、地震が多い。最近では1999年の大地震で、少なくとも1万7千人が亡くなった。地震国という点で日本に似ているためもあり、日本からも地震予知や防災、震災後の復興などについて支援がおこなわれてきた。復興についてはトルコ政府の事業も盛んであり、ワクフを用いた財団の支援活動もなされている。

トルコに関して宗教的に興味深い点の一つあげたい。それは運命論の問題である。トルコでは従来、地震について神の定めた運命であり、避けがたいという運命論的な対応が強かった。ところが、この震災の経験から、建物の強度が弱いために犠牲者が増えたことがわかり、その反省から「運命（地震）ではなく（脆弱な）建物が命を奪う」と、防災意識を高めるキャンペーンがなされた。

ところが、頑健な建物が防災の鍵となると、経済的にゆとりのない人びとには手が出ない。あきらめるしかないのかとがっかりして、かえってこのキャンペーンが逆効果を生んだという。運命を甘受するのでもなく、人知を尽くして防災に励むのでもないとなれば、大きなジレンマが生じる。

6. 戦災の場合——レバノンとパレスチナ

中東では戦争が繰り返し起き、天災以上に戦災が恐い。近年でいえば、2006年夏のイスラエル・レバノン間の戦争、2008年暮れから翌年1月にかけてのイスラエル軍によるガザ地区攻撃がある。

前者では、正規軍であるイスラエル軍が北隣のレバノンを総攻撃し、レバノン側からはイスラーム・ゲリラ軍であるヒズブッラー（ヒズボラ、神の党）が応戦した。レバノン人の戦意をくじこうと、イスラエル軍がレバノン全体を攻撃した点は国際的にも非難を呼んだ。

さて、戦後の復興である。レバノンは自由経済が売り物なので、公共事業が非常に弱い。破壊された道路や橋などのインフラ復旧さえ手が回らないこともあり、被災者のための復旧は遅れた。ヒズブッラーは、日頃から福祉活動を盛んにおこなっているが、この戦争では被災者の住宅整備にいち早く乗りだし、成功をおさめた。欧米ではヒズブッラーは過激派として知られているが、住民の暮らしにとって日常でも緊急時でも頼りになる

団体とされている。

ガザ地区の方は、イスラエル軍による封鎖で生活が困苦をきわめたうえに激しい空爆を受け、多くの家が破壊された。現在でも封鎖が続いているので、復旧も遅れがちである。この地区は2007年夏からハマース（イスラーム抵抗運動）が実権を握っており、統治も復旧もハマースの責任となっている。この組織の基盤はムスリム同胞団なので、もともと福祉活動や救援活動には強みがある。

彼らの活動のなかで目を惹いたのは、寡婦と孤児の救済である。イスラエル軍の攻撃によって、ガザ地区ではたくさんの男性が命を失った。独身者もいたが、家庭もちもいた。当然、夫と父親を失った家庭が続出した。ハマースは「敬虔で資産がある男性」に寡婦を2人目の妻とし孤児を育てよう、呼びかけをおこなった。

ガザ地区のなかでは、これを優れた救済策として歓迎する意見と一夫多妻を助長するとして批判する意見が交錯した。いずれにしても、戦災の救済策としてきわめてイスラーム的な話題であろう。もともと一夫多妻制は、ムハンマド時代に多くの男性が戦死したため福祉的な目的で始められた。現代でもその状況があてはまりうるというのは、私たちには大きな驚きである。

終わりに——東日本大震災とモスク

東日本大震災の際は、各地からさまざまな救援・支援活動がおこなわれた。東京にあるモスクからも、東北にあるモスクの協力も得て、100回に及ぶ炊き出し活動がおこなわれた。震災の直後には、モスクで女性たちが夜を徹して2千個のおにぎりを握り、翌朝に車で被災地に届けるというような活動がなされたという。また、彼らの出身国の料理であるカレーも届けられた。

「なぜ（外国人が）支援に来てくれるのか」と問われて、答えは「これがイスラームですから」だったという。確かに、困っている人たちに食事を供することは、彼らにとって日常的な信徒の務めであろう。イスラームにおいて宗教とは「唯一神を信じ、礼拝をして、困っている人を助ける」ことであることが、わかりやすく示され、現地でも喜ばれる事例となったようである。